

令和 2年 2月

加藤雅之 学位論文審査要旨

主 査 藤 原 義 之
副主査 梅 北 善 久
同 磯 本 一

主論文

Peroral cholangioscopy-guided forceps biopsy and endoscopic scraper for the diagnosis of indeterminate extrahepatic biliary stricture

(未確定の肝外胆道狭窄の診断のための経口胆道鏡検査ガイド下鉗子生検および内視鏡スクレーパー)

(著者：加藤雅之、斧山巧、武田洋平、川田壮一郎、菓裕貴、孝田博輝、山下太郎、濱本航、坂本有里、松本和也、磯本一)

令和元年 Journal of Clinical Medicine DOI:10.3390/jcm8060873

参考論文

1. Peroral cholangioscopy of programmed cell death-1 inhibitor-related sclerosing cholangitis: three case reports

(プログラム細胞死-1阻害薬関連硬化性胆管炎の経口胆道鏡検査：3症例報告)

(著者：斧山巧、武田洋平、加藤雅之、枝野未来、樽本亮平、松本和也、磯本一)

令和元年 Endoscopy DOI:10.1055/a-0948-1271

学 位 論 文 要 旨

Peroral cholangioscopy-guided forceps biopsy and endoscopic scraper for the diagnosis of indeterminate extrahepatic biliary stricture

(未確定の肝外胆道狭窄の診断のための経口胆道鏡検査ガイド下鉗子生検および内視鏡スクレーパー)

経口胆道鏡 (POCS) は胆管癌の診断に広く使用される技術になり、観察だけでなく、観察下での生検も可能である。肝外胆管癌 (ECC) については、新規内視鏡用軟性生検鉗子 (Trefle®) の診断能も報告されている。しかしながら、ECCの病理学的診断におけるPOCS下生検とTrefle®生検の有用性についての比較検討はされていない。このためECCの病理学的診断におけるPOCS下生検とTrefle®生検の有用性と安全性を比較検討した。

方 法

2014年4月から2018年3月の間にTrefle®生検またはPOCS下生検を受けた患者を後ろ向きに登録した。病理学的診断に基づいて、Trefle®生検およびPOCS下生検の診断能を評価した。また、Trefle®生検に関連する有害事象をPOCS下生検の有害事象と比較した。

結 果

胆道疾患の患者34人を登録し、それぞれ14人と20人の患者でTrefle®下生検とPOCS下生検を実施した。Trefle®生検の感度、特異度、正診率はそれぞれ87.5%、83.3%、85.7%であり、POCS下生検では、それぞれ90.0%であった。Trefle®生検とPOCS下生検の診断能に、有意差は認められなかった。Trefle®生検とPOCS下生検の間に有害事象の発生率に有意差はなかった (35.7%対25.0%、 $p = 0.770$)。内視鏡的乳頭括約筋切開術 (EST) 施行率は、POCS患者と比較してTrefle®患者で有意に少なかった ($p < 0.001$)。

考 察

本研究では、ECCに対するTrefle®生検の感度は、POCS下生検の感度と類似していることが示された。ただし、Trefle®生検は、胆道狭窄の病理診断においてPOCS下生検よりも優れている可能性がある。それは、Trefle®はOddi機能の括約筋を保持するためである。本研究では、ESTはPOCSグループよりTrefle®グループの方が少数であった。ただし、Trefle®生検

後の膵炎を含む有害事象をきたした鳥取大学医学部附属病院の症例は、EST未施行の患者で発生しており、先行研究でも同様であったとする報告がある。このため、EST未施行ではTrefle®生検におけるERCP後膵炎の発症要因である可能性がある。Trefle®生検においてESTが必要かどうかは議論の余地がある。

結 論

ECCの病理学的診断においてTrefle®生検とPOCS下生検は同程度の診断能および安全性であった。Trefle®は不必要な乳頭処置を要しない点で有用である可能性がある。